

求められる応用力

——音楽法要の勤修を例として

音楽法要の勤修は難しい？

——求められる現場での対応

しかし、音楽法要の勤修回数が増えているとはいえ、一万カ寺という寺院数からすれば、まだまだ経験者も限られており、さらに勤修時の仕切り役を寺院の近辺で探すのは、そう容易なことではないようです。そのような状況にあるためか、本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、音楽法要の勤修についての問い合わせが増えてきました。

福本康之

(ふくもと やすゆき)

増加傾向にある音楽法要

近年、落慶法要や継職法要など、一般寺院の慶事関連の諸法要において、音楽法要を勤める機会が増えてきているようです。

話を聞けば、お祝いの、あるいは

記念の法要ということで、「讃歌衆さんかしゆう（合唱）も加えた華やかな法要にしたい」という主催者側（住職や門徒総代など）の思いや、「讃歌衆として法要に参加したい」という合唱団（主に仏教婦人会など）の思いが、音楽法要の勤修へと繋がっている、とのこと。

従来の法要であれば、伝統的な寺院建築や荘厳しょうこんなどを想定し、作法が決められています。それゆえ、現場に合わせた変更が求められることは、それほど多くないでしょう。また、あったとしても、経験から解決の糸口をつかめる場合が、比較的多いようです。

しかし音楽法要では、伝統的な法要と異なり、讃歌衆の導入や洋楽器（ピアノやオルガン）の設置とその演奏者の手配など、条件として新たな事柄が付されることも少なくありません。結果、勤修に際して解決しなければならぬ問題も、伝統的な法要の勤修に比べると、かなり特殊なものと言わざるを得ないものが多く、確かに、経験からだけでは処理しきれないのが現実でしょう。

解決方法は経験だけ？

そして、質問される方の多くは、「経験がない」ことをまずもって述べられてから、具体的な問題について尋ねられます。ここからは、具体的な事例をあげて、説明することにしてしましよう。

例えば、讃歌衆の「立ち位置」についての質問——具体的に述べます

と、「讃歌衆は、どこに立てばよいのか？」という内容の問い合わせです。

従来の法要には、讃歌衆という役割がなく、その立ち位置を指示することは、音楽法要に出勤したこのない住職にとって未経験の事柄となります。

しかしこの「立ち位置は？」という質問、実は経験がないにもかかわらず、讃歌衆が法要中「（座らずに立つ）」という「判断」が、既になされているのです。おそらくこの場合は、「合唱団は立つて歌うのが一般的なあり方」ということを知っていることから、讃歌衆は立つて歌うべきである、と判断されているのでしょう。この判断は、経験によるものではなく、合唱団というもののあり方イメージや情報を基準としたものなのです。

判断基準から考えていく

実際の回答でも、「（讃歌衆は）○に立つてもらってください」とお答えすることは、ほとんどありません。

そもそも一般寺院の伝統的な構造や荘厳では、法要時に讃歌衆が立つことが想定されていない（それに対し、役配として定められた導師や結衆、讃嘆衆などは、建築や荘厳においてその場所が確保されていることが多い）ため、具体的にかつ原則論として「ここです」と一律にお答えすることはできないのです。

そこで、件の質問に対して研究所では、「宗教儀礼として、ご本尊のほうを向く」という「儀礼としてのあり方」や、「讃歌衆が立つことによつてご本尊および荘厳が見えなくなるらない」という「演出上の効果

(「美的判断、ただし宗教儀礼であることを逸脱しない範囲で」)など、判断基準を示しながら、一緒に答えを導き出す方法をとっています。

このような方法で答えに至ったとき、比較的多くの方から発せられるのが、「そう考えればよいのですね」という言葉です。

求められる応用力

現代はマニュアルの時代である、ということがよく言われます。確かに、マニュアルには求める答えがあり、物事を進める上で大変便利なものであることは否定できないでしょう。しかし同時に注意しておかねばならないのは、マニュアルには「なぜそうするのか」という、判断基準が「考え方が書かれていない点です。

マニュアルが示す答えは、個別事

例に有効なものですが、少しでも条件や状況が変われば、途端に効力が弱くなったり、時にはまったく役に立たないのみならず、かえって逆効果となることすらあります。

そこで求められるのが、判断基準が「考え方を「応用」し、適切な答えを導き出す、という方法です。

音楽法要だけの話ではない

ここまでの話で、私が何を言いたいのか、もうお気づきの方もおられるでしょう。そうです、この「応用する」という能力、お寺を支える方々にとつては、何も音楽法要の勤修に限って必要な話ではありません。

例えば、対機説法たいきせっぽうということがよく言われます。人を見て、その人に合った法を説くということは、まさ

に自らの基本とする説法方法を、人の個性に即して応用することにほかなりません。

そして、私たちが集う寺院もまた、「お寺」と言葉で一括りにされますが、その実態は、千差万別です。そのお寺の個性ともいべき状況に対応するために必要なのが、この「応用力」ではないでしょうか。

(本願寺仏教音楽・儀礼研究所 主任・常任研究員)